

Title	新しくなった清家文庫
Author(s)	古勝, 隆一
Citation	静脩 (2003), 40(1): 3-10
Issue Date	2003-05
URL	http://hdl.handle.net/2433/37708
Right	
Type	Article
Textversion	publisher

新しくなった清家文庫

京都大学人文科学研究所 助手 古 勝 隆 一

1. 清家文庫成立・拡充の経緯

清家文庫は、本学附属図書館の豊かな特殊文庫の中にあっても、ひときわ輝かしいコレクションであるといえよう。中世以来、大学者を輩出してきた清原家、彼らの知の営為が、さながらこの文庫に収められているのである。優れた学者が蒐集した書物は、それだけでも興味を引く。ましてや、一人ならず二人ならず、数十人もの学者たちが抄写し、集め、伝えてきた書物群である。

この文庫に収まっている書物をかつて伝承したのは、清原家である。略して清家という。清原家は中国古典を伝承した明経博士家の一であるが、広澄(934-1009)以降、頼業(1122-1189)、良賢(1348-1432)、業忠(1409-1467)と歴代の名だたる学者を出し、室町後期の宣賢(1475-1550)がこの家学を大成した。その後、清原宣賢の玄孫にあたる秀賢(1575-1614)の時に、舟橋家を称し、その子の秀相が舟橋家を嗣ぎ、もう一人の子、賢忠が別に伏原家を立てた。近世以後は、この二つの家によって清原家の学問が伝えられた。なお舟橋家、伏原家の人物は、しばしば清原氏を自称しているため、江戸時代になっても清原家の人間としての自覚は続いたものと思われる。

清原家ゆかりの書物が本学に帰した由来は、次の通りである。昭和26年12月5日、当時の舟橋家当主、清賢氏が、1627冊、2舗、1巻、文書13枚を本学に寄贈され、その後さらに数次に及び本学は同家より書籍を購入し、また寄贈を受けた。これを主体とする清原家伝来の書物を、本学では「清家文庫」と名づけた。

ただ清原家の書物は門外不出であったわけではなく、近世以後、舟橋、伏原の両家から流出したものも多い。それゆえ、本学附属図書館の

清家由来典籍は確かに豊富ではあるが、それが清家の学問的営為のすべてを示しているわけではない。本学でも明治40年頃、いくつかの清家本を市場にて求めている。これらの多くは若林春和堂という古書肆より購入されたものであり、すべて伏原家に伝来した本らしい。

これらの書物は、従来からむろん貴重書として附属図書館で取り扱われてきたものであるが、2001年にリストアップされ、しかるべき手続きを経て、新たに清家文庫の貴重書として加えられることとなった。

つまり清原家の蔵書は近世初期以来、舟橋、伏原の二家に分かれて伝えられたが、本文庫は、舟橋家伝来本を基礎として、伏原家の伝来本をも併せる運びとなったのである。

2. 「天師明経儒」印について

一冊の書物の来歴を考える際に、蔵書印や奥書などがたいへん重要な手がかりとなる。目録その他の書物に明らかな著録がある場合を除けば、その書籍の来歴はそれ自体によってしか知ることができない。舟橋家に伝えられて、戦後まもなく本学の所蔵するところとなった書籍には、多くの蔵書印が押されている。それとは別に、上述のごとく本学が書肆から購入した一部の書物にも、清家の旧蔵を示唆する蔵書印が押されていた。私が確認し得た限りで、それらを列挙しよう。「伏原」(長方形、白文)、「伏原」(方形、朱文、単郭)、「伏原」(方形、朱文、重郭)、「伏原蔵書」(長方形、白文)、「天師明経儒」(長方形、白文)、「天師明／経儒」(楕円形、朱文)、「清原」(円形、朱文)、「清原」(方形、朱文)、「清原」(方形、白文)、「清／原氏」(方形、白文)、「天師明経儒」(長方形、朱文)、「天師明経儒」(長方形、朱文)、「明経」(楕円

形、朱文)「宣通ノ之印」(方形、朱文)「宣ノ條」(方形、朱文)「宣條ノ之章」(方形、朱文)「宣光ノ之印」(方形、白文)「宣ノ光」(方形、朱文)などである。

このうち特徴的なのは、「天師明経儒」(「天皇の師たる明経儒者」の意)印が四種も存在することである。舟橋家からの寄贈・購入による書籍に押された印記のうちにも「天師明経儒」印一種が確認できるが、それとは異なるものである。都合、五種の「天師明経儒」印がある。

〔甲種〕「天師明経儒」(長方形、朱文。5.2糎×1.3糎)

『塵芥』(清家文庫4-85/シ/1貴)、『古文孝経』(清家文庫1-66/コ/10貴)などの多数の書籍に見える。これらは旧来の清家文庫の貴重書である。下に紹介する31『毛詩』にも見えるが、これは舟橋家旧蔵本が伏原家に入ったものらしい。

〔乙種〕「天師明経儒」(長方形、白文。5.6糎×2.1糎。伏原宣通所用印か)

34『古文孝経』、『大学』(清家文庫1-66、夕5貴)。『大学』は他の印より見て、伏原家旧蔵のものが舟橋家に入ったものらしい。

〔丙種〕「天師明経儒」(楕円形、朱文。長径2.9糎。伏原宣條・宣光所用印か)

01『周易』、07『尚書』、09『尚書抄』、10『毛詩抄』、14『春秋経伝集解』、22『論語義疏』、24『孟子抄』

〔丁種〕「天師明経儒」(長方形、朱文。4.5糎×1.8糎。伏原宣光所用印か)

04『易抄』、08『尚書抄』

〔戊種〕「天師明経儒」(長方形、朱文。4.8糎×1.1糎。伏原宣光所用印か)

16『大学』、18『中庸』、19,20『論語』、37『中庸』

以上、「天師明経儒」印が複数存在することはあまり知られていないことであると考え、その別を記し、伏原家蔵書の参考として供したい。



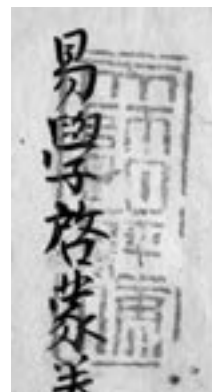
甲



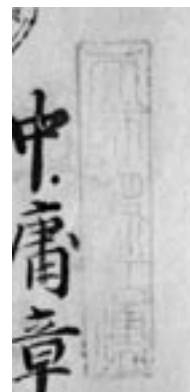
乙



丙



丁



戊

「天師明経儒」印五種

3. 新しく加えられた書籍

以下、清家文庫に新しく加えられた書籍を列記する。印と識語等は、なるべく記載する。

写本

- 01 『易経』(『周易』) 王弼注〔国賢〕写 2冊
存6巻(巻1-6) 清家文庫1-62/工/6貴 98066
8行14字 注双行 四周单边有界
印「宣條」,「宣光之印」,「天師明経儒」(丙)
備考 下に見える02『周易』の僚巻。
- 02 『周易』 慶長6年、〔国賢〕写 4冊 存4巻(巻7-10) 清家文庫1-62/シ/8貴 98065
8行14字 注双行 四周单边有界
第三冊奥書「慶長六〔辛丑〕年潤十一月三日
写之 / 此巻吉田ニテ半分西岡勝龍ニテ / 半分
書立ル也」。
- 03 『易経啓蒙通釈』(『易学啓蒙通釈抄』)
〔業賢〕写 1冊 87678 清家文庫1-62/工/8貴
和文17行内外
- 04 『易抄』(『百衲襖』) 桃源瑞仙(亦庵) 撰 文
明年間、桃源瑞仙写 23 冊 98063 清家文庫1-
62/工/7貴
和文・漢文14行
印「伏原」(白文),「宣光之印」,「天師明経
儒」(丁)
- 05 『易抄』 〔国賢〕写 2軸、2巻 107453 清家
文庫1-81/工/1貴別
第1軸巻首に「侍従三位(花押) / 賢忠卿秘書
易抄 / 他覧完無用也」と墨書。
印「当」(円形、黒文)
- 06 『百衲襖』 文明年間、桃源瑞仙(亦庵) 写 2
冊 存2巻(巻7,8) 107455 清家文庫1-62/ヒ/2
貴
和文・漢文14-16行
第7巻本文中に「文明乙未三月廿三日 亦庵
志」(桃源瑞仙) 第1冊・2冊の後表紙に「這
百衲襖多紛失 / 而七八漸二冊存」(桃源瑞仙)
と墨書。



- 07 『尚書』 孔安国伝 永正11年、宣賢写 2冊 存2
巻(巻7,10) 清家文庫1-63/シ/5貴 別
86774
7行14字 注双行 四周单边有界
巻7奥書「本云嘉応三年三月十五日校摺本了
在判〔直講近業御判〕 / 永正十一年三月十四
日以唐本書写之即加朱墨訖 / 少納言清原朝臣
(花押) / 建長三年七月廿六日以家秘説奉授
巫相尊閣畢 博士清原仲宣 / 以右奥書本校正
之加点無相違者也 宣賢(花押)」(宣賢)。巻
10にも同様の奥書。
印「東」(朱文),「宣條」,「天師明経儒」(丙)
備考 宣賢写『尚書』は各機関に分蔵される
が、これはそのうちの二冊。

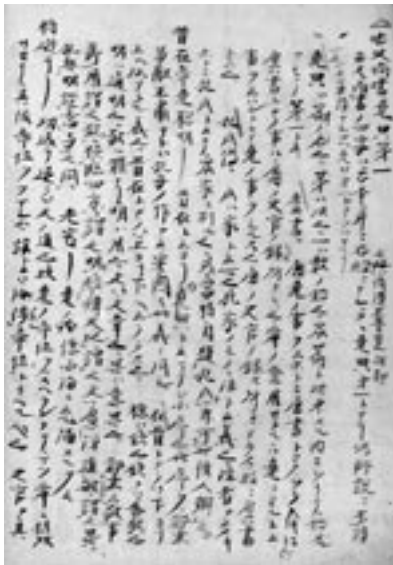


08 『尚書抄』〔室町〕写 13冊 13巻 清家文庫1-63/シ/7貴 98069

和文16行、経文は大字 四周単辺無界
印「宣光之印」、「伏原」(白文)、「天師明経儒」(丁)、「宗密」(朱文)、「大通」(朱文)

09 『尚書抄』〔宣賢〕写 2冊 存2巻(巻1・2) 清家文庫1-63/シ/8貴 107454

和文17行 無辺無界
印「宣光之印」、「清原」、「天師明経儒」(丙)



10 『毛詩抄』〔業賢〕写 10冊 20巻 1-63/モ/1貴 74709

和文14行 無辺無界
第2冊末に「天文八年四月十日」の墨書
印「伏原蔵書」、「天師明経儒」(丙)、「宣光之印」、「宗密」、「大通」

11 『詩経抄』(『毛詩聴塵』) 宣賢〔・業賢〕写 11冊 20巻 清家文庫1-63/シ/6貴(第1冊 168508、他は98068)

和文17-22行 無辺無界
第5冊末に「侍従三位清原宣賢私抄之(花押)」と墨書(宣賢)。
印「伏原」(白文)、「鈴鹿氏」(朱文)、「宣條」(朱文)、「青云器」(白文)
備考 第1冊は久原房之助氏寄贈本。第1冊内題は「毛詩聴塵」。

12 『礼記抄』 宣賢写 1冊 存1巻(巻1) 清家文庫1-64/ヲ/2貴 64445

和文17行 無辺無界
巻末奥書「清三位入道宗尤抄之(花押)」(宣賢)

13 『月令抄』〔室町〕写 2冊 清家文庫1-64/ケ/2貴 64446

和文12行 無辺無界
印「大通」、「宗密」
内題「礼記巻第五」下に「享祿四年壬五月環翠軒宗尤抄之」と墨書。

14 『春秋経伝集解』〔南北朝時代〕刊、及び宣賢〔・業賢〕写 20冊 存20巻(巻11-30) 清家文庫1-65/シ/7貴 87671

経伝集解とその抄物を交互に配した書物。経伝集解は、刊本と宣賢写本とを併せたもの。8行17字 四周単辺有界。抄物は宣賢・業賢写、22行 無辺無界。

第11冊奥書「永正十二年二月廿二日、於燈下以唐本書写之、即以宝寿院/殿〔常宗〕御自点終朱墨点了/少納言清原朝臣(花押)」「永正十四年七月 日、親王御方御読書参之/八月十一日申終了/宣賢」「大永元年九月四日於 禁中竹園講尺申了/同十二日同十七日同廿一日、四ヶ度申了」(宣賢)。以下、各冊に同様の奥書。

印「宣條」、「天師明経儒」(丙)



15 『春秋左伝抄』 宣賢写 4冊 存4巻(巻17,18,21,27) 清家文庫1-65/シ/5 貴 98064

16行以下不等 巻17,18は四周单边無界、巻21,27は無辺無界

第1冊首に「環翠軒宗尤私抄之」と墨書(宣賢)、印「伏原」(白文)、「船橋蔵書」(朱)

備考 『左伝聴塵』12冊(宣賢写、944923、清家文庫1-65/サ/1 貴)の僚巻である。

16 『大学』朱熹章句〔室町末〕写 1冊 1巻 清家文庫1-66/夕/7 貴 98067

7行14字 注双行 四周单边有界

本奥書「此本加一見朱墨両点無相違頗可謂証本矣 / 文龜第三卯月初十 清原入道常益桑門隱徒判 / 借請清給事中宣賢本令書写同点之今日終功畢 / 永正二年五月十九日 左大史小槻宿祿判 / 以故入道証明之点本被遂其功訖寔為後葉龜鏡而已 / 給事中宣賢判」。

印「宣光之印」、「天師明經儒」(乙)、「(戊)」、「宣光」

備考 下に見える18『中庸』及び19『論語』と同じ人物による写本。

17 『中庸』朱熹章句〔枝賢〕写 1冊 1巻 清家文庫1-66/チ/4 貴 64450

7行15字 四周单边有界

奥書「僧俗学徒関東学士十三經訓点清濁悉背先儒之説 / 且失師家之伝悲哉予憐子孫赴邪路一字不闕点之亦 / 清濁字声指之為令読易不依仮名使是亦一之術也可 / 深秘而已 侍従三位清原朝臣(花押)〔俗名宣賢法名宗尤 / 号環翠軒〕(宣賢)。

印「船橋蔵書」



18 『中庸』朱熹章句〔室町末〕写 1冊 1巻 清家文庫1-66/チ/6 貴 98070

8行16字 注双行 無辺無界

本奥書「永正八年六月廿日以唐本遂書写之功同加朱墨訖 / 加點以証本校合了 少納言清原朝臣 在判 / 宣賢一〔大内被官 / 飯田将監発起〕一〔南禅寺林首座 / 発起 大永五〕一〔享祿三 於能州 / 畠山左衛門佐義総亭〕一〔於禁中講九ヶ度 / 天文四十一十三始廿九終〕一〔於親王御方講 / 天文四十一始廿八終〕一〔於越前一乗谷講天文十五正廿七始之 / 二月八日終九ヶ度〕一〔於越州一乗谷安養寺講天文十七 / 三十一始之五月十九日終九ヶ度〕 / 枝賢一〔弘治二二月於摂州芥川城 / 松永弾正忠久秀発起〕」。

印「宣光」、「天師明經儒」(戊)、「伏原」(方形、朱文、重郭)

19 『論語』何晏集解〔室町末〕写 2冊 10巻 清家文庫1-66/口/9 貴 64448

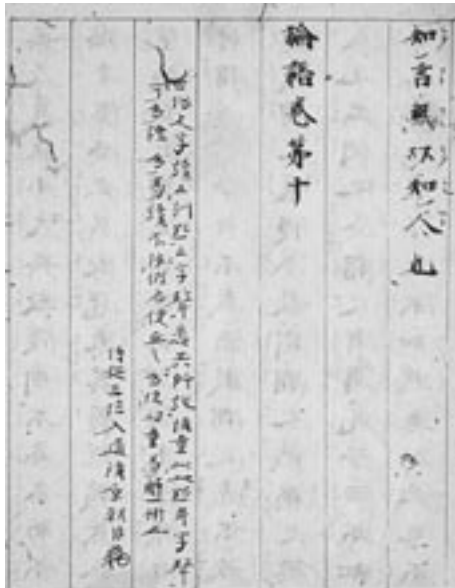
7行14字 注双行 四周单边有界

第1巻本奥書「永正九年正月十五日以累家秘本書写之即加朱墨訖 / 少納言清原朝臣判(下略)」。各巻末に同様の本奥書。第2冊末に「正二位清原宣條 / 正二位清原宣光 / 当家古本代々以此家本御読書之時 / 朱墨之点可然云々他覽他借堅用 / 捨之事」の墨書。

印「宣光」、「伏原」(白文)、「天師明經儒」(戊)、「伏原」(方形、朱文、重郭)

20 『論語』何晏集解無注本〔室町末〕写 1冊
10巻 清家文庫1-66/口/7貴 64449
8行16字 四周単辺無界
印「宣光」、「天師明經儒」(戊)

21 『論語』何晏集解無注本〔枝賢〕写 1冊 存5
巻(巻6-10) 清家文庫1-66/口/8貴 64451
7行15字 四周単辺有界
第10巻奥書「世俗文字読云訓点云字声悉失師
説後葉以此点并字声 / 可為証為易読不依仮名
使点之為使幼童易解一術也 / 侍従三位入道清
原朝臣(花押)」(宣賢)。見返しに「子孫為可
惑文字読清濁一字不闕点之同指声者也 / 清三
位入道宗尤(花押) / 置字大略不読之当読之
置字点之」の墨書(宣賢)。



22 『論語義疏』皇侃撰〔近世初期〕写 9冊 存9
巻(巻4欠) 清家文庫1-66/口/8貴 64444
8行20字 注双行 無辺無界
印「宣條」、「天師明經儒」(丙)

23 『孟子』趙岐注 永正年間、宣賢写 7冊 14巻
清家文庫1-66/毛/2貴 87673
7行14字 注双行 四周単辺有界
巻1奥書「以摺本書写之加朱墨訖 少納言清
原(花押) / 永正十三年十月十七日於 親王
御方講尺申了 宣賢 / 同廿一日 同廿七日
三ヶ度申了 / 享祿三年 於登州島山左衛門佐

義総亭講之 / 享祿五年七月十一日十二日十三
日於若州小浜栖雲寺〔玉首座 / 竹田舎弟〕講
之 / 天文十五年四月 於越前国一乗谷講之三
ヶ度」(宣賢)。以下、各巻に同様の奥書。第
7冊末に「孟子篇叙」を載せ「御奥如斯 / 孟
子篇叙人之本無之仍先達等未加點又不読之余
至徳三歳講談之次以僻案 / 加點本經點多以違
義理之間又以改正之而已 / 蔵氷軒文翁良
〔賢〕 / 嘉吉元年八月廿五日以曾祖父之御説
授嫡男主水正兼直講宗〔賢〕此本御奥 / 書如
斯可為証本矣 環卒軒言翁業忠」。
印「東」(朱文)、「宣條」、「修蘭亭」(長方形、
朱文)、「伏原」(白文)

24 『孟子抄』永正年間、宣賢写 7冊 14巻 清家



文庫1-66/毛/4貴 107449

和文22行 四周単辺有界

第7冊奥書「右侍講席卒書之分不改言辭不飾
文章抄之私又加 / 正義大全等師家庭訓須雖無
毫釐之差蒙昧不 / 敏定可致千里之隔後葉索隱
芟煩不亦宜乎 / 少納言清原宣賢(花押)」(宣
賢)。
印「宣條」、「天師明經儒」(丙)、「伏原」(白
文)

25 『古文孝經抄』天正9年、圓宗写 1冊 1巻 清
家文庫1-66/口/17貴 64447
和文17-18行、經文は大字 四周単辺無界
尾題下に「清三位入道宗尤判 / 宣幸」の墨書。
奥書「天正九仲秋日於石益婦春軒下書写之 /
圓宗(「覚甫」朱印)」。
印「宣幸」、「覚甫」(円形、朱文)

- 26 『日本書紀』神代卷(『日本書紀抄』)〔室町末〕写1冊 清家文庫5-05/二/7貴 64453
和文18行 無辺無界
本文末、本奥書「先年雖令抄出為讓与神祇小副卜部兼右〔愚息丸ノ少名竹鶴丸去年五月六日元〕重加琢磨書之ノ同文字読清濁以朱指声訖卜氏秘説不違背一句於纂ノ疏者私書加為子孫龜鏡輒勿出函底矣ノ大永七年正月卅日終下卷功 侍從三位清原宣賢ノ天文二年三月廿一日於青蓮院講始同五月六日講終〔已上此卷ノ五ヶ度〕ノ環翠軒宗尤」。「從二位清原宣光蔵」の墨書。
印「宣光之印」(方形、朱文)、「清原」(方形、朱文)、「明經」(丙)、「岩神寺ノ蓮乘院」(方形、朱文)
- 27 『職原抄〔抄〕』〔近世初期〕写1冊 清家文庫2-03/シ/2貴 64454
和文12行
卷首に「清三位入道宗尤私抄〔号環翠軒〕ノ此抄八北畠ノ准后親房公ノ作也准后ノ事八南朝二於テノ宣下也ノ当朝二於テ八不可用トイヘトモ今二北畠ノ准后ト称シ来レリ是他二異ナル事也」と墨書。本奥書「以講尺之次私抄之了重可書加而已ノ環翠軒宗尤(花押)〔判形ノ如此〕」。
- 28 『令聞書』一條兼良述 一條冬良聞書 元禄11年写1冊 清家文庫2-03/リ/1貴 64456
和文11行
印「宣通之印」(方形、朱文)、「清原氏」
卷末に「元禄十一年〔戊寅〕七月廿日ヨリノ廿三日再校合畢也ノ右一冊先考之手ノ沢也(花押)」の墨書。
備考 『続群書類従』所収の『後妙華寺令聞書』と同じく、延徳四年の藤原隆量の本奥書を持つ。
- 29 『和論語』(『秋津真言葉』) 清原良業撰 橘三喜(為証庵)写1冊 清家文庫1-84/ワ/1貴 64458
和文10行内外
卷首「為証庵三喜撰」の墨書。奥書「元禄二〔己巳〕年閏正月下旬ノ第卅五代ノ正二位清原宣條謹伝之(花押)」。
印「宣條」(円形、朱文)、「清原」(円形、朱文)、「伏原」(白文)

古活字版

- 30 『周易』王弼・韓康伯注 慶長10年刊、古活字版 1冊 存6巻(巻1-6) 清家文庫1-62/シ/9貴 87672
8行17字 注双行 四周双辺有界
第1冊巻首「寛保辛酉夏以考本加ノヲコト点了宣條」。
印「宣條之章」(白文)、「清原」(白文)、「天師明經儒」(丙)、「鹿苑寺」(長方形、黒文)
- 31 『毛詩』毛伝鄭箋 古活字版 4冊 20巻 清家文庫1-63/モ/5貴 87677
8行17字 注双行 四周双辺有界
印「榮相」(方形、朱文)、「修蘭亭」(白文)、「天師明經儒」(甲)、「經賢」(方形、朱文)、「清原」(壺形、朱文)、「宣條」



- 32 『春秋經伝集解』 古活字版 15冊 30巻 清家文庫1-65/シ/6貴 87674
8行17字 注双行 四周双辺有界
印「伏原」(白文) 宣光
- 33 『礼記』鄭玄註 古活字版 10冊 20巻 清家文庫1-64/ラ/3貴 87675
8行18字 注双行 四周双辺有界

第5冊末以下の各冊に、対校本の奥書を写す。
印「伏原」(白文)

34 『古文孝経』孔安国伝 古活字版 1冊 1巻 清家文庫1-66/コ/16貴 107450

8行17字 注双行 四周双边有界

印「天師明経儒」(戊)、
「宣通之印」、
「伏原氏」、
「天師明経儒」(乙)

35 『論語』何晏集解 古活字版 2冊 10巻 清家文庫1-66/口/10貴 107452

7行17字 注双行 四周双边有界

第1冊末に「家伝以秘本加朱墨 侍従三位宣光」の墨書。

印「宣光之印」、
「天師明経儒」(丙)

36 『孟子』趙岐註 古活字版 3冊 存13巻(巻6欠) 清家文庫1-66/モ/3貴 87676

7行17字 注双行 四周双边有界

印「宣條之章」、
「天師明経儒」(丙)

37 『中庸』朱熹章句 古活字版 1冊 1巻 清家文庫1-66/チ/5貴 107451

7行17字 注双行 四周双边有界

印「天師明経儒」(戊)、
「清原」(白文)

4. その価値

以上、37点の書籍はまことに貴重書の名に恥じぬものであるが、なかでも目を惹くのは、07『尚書』、09『尚書抄』、11『詩経抄』、12『礼記

抄』、14『春秋経伝集解』、15『春秋左伝抄』、23『孟子』、24『孟子抄』と8点も宣賢写本が存することである。舟橋、伏原の両家に伝えられた宣賢の写本が京都大学で集い得たことは、実に喜ばしい。特に『春秋左伝抄』は、従来の清家文庫本『左伝聴塵』(12冊、宣賢写、944923、清家文庫1-65/サ/1貴)とともと同じ一部の本として書かれたものであり、それが別々に蔵されていたのが再会したものである。

また04『易抄』(『百衲襖』)、06『百衲襖』は、いずれも桃源瑞仙の自筆本であり、きわめて貴重である。清家文庫中にはもともと室町時代の易学に関する書物が多いが、03『易学啓蒙通釈抄』などをも含め、ますます充実したものとなった。

それ以外のもので興味深いのは、17『中庸』、21『論語』の2点である。21『論語』を、枝賢(しげかた、1520-1590)写『論語』(重要文化財、清家文庫1-66/口/5貴)との比較を通して、枝賢の写本であることを知った。17と21は同一人物による写本なので、これらは枝賢の手になることになる。この両書に対して、宣賢が奥書を加えているのであるが、枝賢は宣賢の嫡孫に当たる。宣賢が何を思いながら奥書したのか、後人の空想を喚起する本である。

(こがち りゅういち)